

『奥の細道』小見（四）

板 坂 元

十、遙に一村を見かけて

那須の黒はねと云所に知人あれば是より野越にかゝりて直道をゆかんとす。遙に一村を見かけて行くに雨降日暮る。農夫の家に一夜をかりて……

この文であまり注意をはらわないため、訳語が不正確になつてゐるのは「見かけて」という個所である。手許にある注釈書二十冊近くにあたつて見ると、いちばん多いのは原文のまゝ「見かけて」としたものである。おそらく現代語と同意に解したものと思われるが、現代語で「彼はこのあたりでは見かけない人だ」という風に使われ「本を見かけてやめた」という時の「見かける」ではなからうしている。「見受ける」の意である。その他「みとめながら」「見つけて」と訳したのもある。

がこれらも右と同じ解釈と考えられる。注釈書の大部分はこれにしたがつてゐるが、これとちがつて「目に入つたのでそれを目当に」（志田義秀）「目ざして」（岩田九郎）「目標にして」（松尾靖秋）の三氏が「目ざして」と解する説をとつておられる。私は後者の解に賛成するものであるが、三氏のうち志田氏は口訳だけでそれについて何も言及しておられず、岩田氏は「見かけはみとめて行く意だが、ここではそれを目ざして行く意に解した方がよからう」との説明も、松尾氏の「見かけは目にかけるの意」として「目標にして」と解されるのも、この文の場合のみを特別視されたように思われるし、その根拠も明確に示されてないかに見える。そのため今後、前者の説をとる注釈家も現れないとも限られないので、一応根拠をはつきりさせておきたいと思う。

この「見かけ」という語は日葡辞書の訳語を見ると「見をつける」「目ざす」の意にとつてあるようで、「目がける」とほとんど同じような意味であつたことがわかる。また私の採集した例でもその意味に解される。例えば、

是皆問屋の召仕の女にはあらず、銘々に宿を持って有ながら旅人を見懸てあつまるよし。〔好色一代男〕巻三、木綿布子もかりの世)

これなどは、「みとめる」「見つける」等では意味が通じない。「めい／＼家を持つていながら問屋に泊つている旅人を目がけて(に目をつけて)集るとのことだ」とでも訳すべきところで、奥の細道の場合もこれと同様に解すべきかと思う。また、少くとも現在の「見かける」の意味は当時なかつたようであるから、奥の細道の場合だけを特例とするに及ぶまい。語意が変遷しているのを見落したために誤つた一例であるが、細道にはところどころこんな茨があつて人をきざすつけるようである。

十一、読みの問題

前身に「一衣」の読みについて言及したが、一般に奥の細道中の語彙の読みについては、あまり関心が持たれていないようである。それは、読みがどうあろうと原文の理解には支障を来さない故であるが、こういう文学作品を鑑賞するためには、また特に奥の細道のように地の文まで韻文的な要素を

持つ作品の鑑賞の際には等閑視することのできない問題である。また常識的な読み方が、明治以後の読み方であつて、江戸時代にはちがつて読まれたということが判明したなら、いや明らかにすることができのなら、その方面にも探究の目を向けることは必要なことである。

例えば太田神社の項で「平士」という語が出て来るが、勝峰・岩田の両氏が「ヘイシ」と読まれた外は(私の調べた範囲で「ヘイシ」と読んでいる文献はなかつたが、何か抛るところがあるのであろう)、諸書ごとごとく「ヒラザムライ」と読んでゐる。これが古くは「ヒラサブライ」であつたことは日葡辞書などによつてわかるが、「ヒラザムライ」と読むようになったのはいつごろからであるか。手許にある「合類大節用集」の万延二年板も「ヒラサブラヒ」と仮名がふつてあり、私の知るかぎりでは、「ヒラザムライ」という読みの例はない。こういう江戸時代以前にできた武家言葉は伝統的な読み方が残りやすいものであるから、諸書のとつた読みは明治以後に出来たものではあるまいか。想像を逞しくすると、貧乏侍というような語の読みから類推して成立したものではないかと思われる。私は「ヒラサブライ」の読みをとりたが、少くともこういう伝統的な読みとちがうものを採用する従来の説はその根拠を明らかにしなければならぬと思う。このような問題がいくつあつて、その中には解決の困難なものもあるので以下に例示して大方の御示教を俟ちたいと思う。

まず「往昔」という語について見る。この語は奥の細道の中に数回見出される。

往昔此御山を二荒山と書しを空海大師開基の時日光と改給ふ

往昔むつのかみにて下りし人此木を伐て名取川の橋杭にせられたる事なとあればにや

往昔源氏に属せし時義朝公より給とかや

往昔遊行二世の上人大願発起の事ありてみつから草を薺土石を荷ひ泥淳をかはかせて

例によつて諸書を調べてみると、すべて「わうせき」と音読するものと、「むかし」乃至は「そのかみ」と訓読するものと、場所によつて音訓を使い分けているものとの三種類に分けられる。たゞ例外として古典全書のみは、日光の個所のみを「わうじやく」、他は「わうせき」としている。(たゞし武隈の個所には振仮名がつけられていない) これについて論及してあるのは角川文庫本の補註(同書四四頁)のみで、

往昔 多田神社の条でこの語に曾良本では「其昔」の字をあて、また敦賀の条の本文往昔とあるところを、四幅対に載せる同旨の文には「むかし」となっているが、素龍本では「往昔」と「昔」とを使ひわけをしていると思はれるので本書ではすべて「わうせき」と音読することにした。そのかみ」あるひは「わうじやく」と読む説もある。

となつている。音読するか訓読するか非常に難しい問題であ

つて、まだ結論らしいものを得るに至つていないが、音読の場合の「わうせき」とするのは如何であろうか。日葡辞書をはじめ古い辞書類はことごとく「ワウジャク」と読んでいるが、「ワウセキ」の読みはいづごろ一般化したものであろうか。試みに節用集類で検してみると寛永十二年本「節用集」・寛永二十一年本「二体節用集」・慶安四年本「真草二行節用集」・萬治二年本「真草二行節用集」・享保二年本「合類大節用集」等、すべて「ワウジャク」となつている(シの濁点の落ちたものもあるが)。もちろん節用集類が規範意識に支えられていて、古い読みを踏襲したことは考慮に入れられねばならないし、元祿をすぎると漢音読みが流行することも当然考え合わせねばならないが、当時の標準的な読みとして、「わうじやく」を採用することは不自然ではないのではあるまいか。当時の資料の調査はまた不十分だが、乏しい例だけいうところでも述べたが、新しい「わうせき」の読みを採用する立場からその根拠が示されるまでは、少くとも伝統的な読みにしたがうのが安全であろう。

つぎに「かがやく」について見てみると、これは日光の項に

今此御光一天にかゝやきて恩沢八荒にあふれ
とあるのをはじめ数カ所認められる。諸書はもちろん「かがやく」としているが、古く「かかやく」と清んで読んだもの

が、いつごろから「かがやく」となったものか。一般にこう
いう場合に、下限を明らかにすることはまだ行われていない
ので、今これを急に解決することは困難であるが、私の気の
ついたもので、元祿時代に「かがやく」となっているものは
ない。

檜木作りの台格子に二重座の砲釘を打かゝやき、奥深に豊
なる住居（本朝二十不孝、三ノ二）

是はと思見あげたれば、塔とやらん殿とやらん光りかかや
く屋作りの雲のごとくに（死靈解脱物語附書 上、十三ウ）

私もランダムにカードをとつていっているだけなので、断定的な表
現は避けたいし、この時代の板本が清濁について厳密性を欠
いていることを当然考え合わせるべきであるが、不思議に「か
がやく」となっているものには出会わず、見当つたのは右の
例文のようなものであつた。また、調査した節用集はすべて
「かゝやく」になつてゐる。

これも資料を博搜した上で明確な下限を求めなければなら
ないが、近世に入ると清濁の資料は飛躍的に量が増大するの
でなか／＼短時日に解決できそうにもない。だが奥の細道で
も既に問題となることであるから、国語学の畑に委せない
で、気のついた資料はどんどん提出すべきだと思ふ。資料が
多いだけに操作も困難であるが、規範意識の変遷をさぐるに
はよい場であるかも知れない。（なお使用した節用集の名は例擧
しなかつたが、「往昔」の項にあげたものの外、萬治二年板「真草

二行節用集」・寛文五年板「真草二行節用集」・延宝八年板「合類
節用集」・貞享五年板「龍頭節用集」等すべて「かかやく」となつ
ている」

こういう場合とちがつてすでに問題としてとりあげられて
いるものもある。

幻のちまたに離別の泪をそゝく
周知の旅立ちの個所にある、この「そゝく」は諸書ことごと
く「そゝぐ」と濁つて読んでいる。これについては龜井孝氏
の詳細な論考があるので、ここで喋々するまでもないが「国
語と国文学」昭和二年七月号、同氏「ソソクVソソグ—
Excursus:「美那曾會久」について—」参照）。一六〇〇年
校ドチリナキリシタンに見出される「ソソグ」以来、乏しい
ながらも「ソソク」に並行して「ソソグ」が見出される現象
は、この奥の細道の場合はどういうふうに関連させて考えら
れるだろうか。特に太宰春台はその「倭説要領」（享保十三年
刊）に

灑サイ 酒ト同ジ、ソ、クト清テイフベシ、クノ字ヲ濁テ、ソ
、ゲトイフハ訛ナリ

と云つてゐる。これは龜井氏の引用されているもので、こう
いつた規範意識の下にあつた語を、現在の常識的な読みで黙
過してよいものかどうか。その上、龜井氏のあげられなかつ
たもので、「合類増補
二行節用集」（貞享五年刊、松会板）には
「酒」となつてゐるし、「合類大節用集」（享保二年刊、村上勘兵

衛・文三郎(板)にも「瀧」^{ソツノ}として、以下に洒・泛瀟・濺・注・瀉・灌の字があげられているのを見ると、辞書類にも登録されるほど「そくぐ」の読みも行われたかにも考えられるので、問題は容易に解決できそうにもない。しかし少くとも注釈家は一応立ちどまつて関心を示すべきではなからうか、ということだけは云つてもさしつかえないであろう。

節用集類を見ていて疑問が生じるのは、まだいくらもあるようだ。例えば

むつまじきかきりは香よりつとひて舟に乗て送る

の「むつまじき」を「むつまじき」と読むのかどうかである。日葡辞書などにはその古い読み「むつまじ」が出ているが、饅頭屋本節用集「昵敷」^{ムツマジ}とある外、私の見た節用集には清音・濁音両方ともに見出される。(たゞし、私の見たものでは濁音になる場合は「むつまじく」と連用形があげてある)

むつまじいめをとらしいね物がたりもせう物と…(心中天の網島「七行本」)

では濁点がついている。(板木の成立が享保二年とはかぎらないが)これも資料をもつと集めて何とかしなければならぬ語である。「短冊」が「たんざく」か「たんじやく」か、「黄昏」が「たそかれ」か「たそがれ」か、等々奥の細道はまことにわずらわしい旅路ではある。

以上で問題になる語の幾つかを例示したが、こういう点も最近精細をきわめて来た奥の細道研究は明らかにすべきかと

思う。私はなるべく古い読み方を採用したいが、それは北村季吟の教をうけた芭蕉であり、その紀行文にも多くの古典語を採用した芭蕉であれば、彼の意識では伝統的なものが強かつたであろうと想像するからである。しかし漢字の訓読の場合には逆に非常に新しがり屋であつた芭蕉も想像されなことはないもので、いちがいに古きにつくわけにも行かない。大方の御示教を仰ぎたいものである。たゞ、くり返して云いたことは、今日の常識で安易に読み進むことはもつとも危険であるということである。「こまかた」が「こまがた」になり、「たかたのばば」を「たかたのばば」にしてしまふ御時勢の常識など、まつたくあてにならないからである。

(なお節用集は複製本以外はすべて、成城大学図書館蔵本によつた。おびただしい類書の中の一部であるが、未見のものについては後に補充したいと思う)

追記、前号の小見に関して殿田良作・深井一郎の両氏から懇切な御教示をいただいたので以下に追加しておきたい。

一、「文蓬萊」の刊年について、拙稿で「元禄初年刊」としそれから「芭蕉の読んだにちがいない」としたのは誤りで、元禄十一年刊とすべきである。したがつて芭蕉が見たにちがいない云々の個所は抹殺される。(これには星野麦水氏の考証、及び頼原退蔵氏の考証が存する。なおこの項殿田氏の御指摘による)

二、「一衣」については、「日葡辞書」「落葉集」に「ロドリ

ゲス大文典」と同じ例が見出される。(以上深井一郎氏の御教示による) したがつて、「一衣」の読みは動かしがたいが、もつとも近い例として次の文が見つかった。

春宵一衣しゅんせう いちえん千枚所ちんまいどころ〔好色一代男〕(巻六)

詩歌と人生

わたくしの演題はいかめしいが、内容は隨筆です、もしくは雑談です。

さて今の世は低級で雑音の多い、功利的にのみ反響する、そのことを自覚しすぎてゐる人々が高い所にゐる、面白くない世の中ですが、昔はどうか。昔許り賞めるのはよくない。が歴史に書き忘られたいい面も沢山ある。さういふ昔こそなつかしい。

たとへば支那では国家社会に超絶した詩人もあれば悲壯な愛国に終始した詩人もをる。前者は自分の世界を築いてその

漢詩のもじりであるが、一衣(いちえ)という語が存する故に可能となる洒落であるから、例としてさしつかえないと思ふ。なお、御教示をいただいた両氏に深く感謝したい。

(二九五五・九・二六稿)

(本学専任講師)

日夏耿之介

中で詩人としての職能にいそしんで悠々としてゐました。さういふ風な心境にある芸術家といふものは実は決して支那ばかりではない、イギリスにもある、フランスにもある、日本にもありました。今日では残念ながらさういふ気分がだんだんうすらいで来て、何だか詩や書や画やその他の姉妹芸術にうちこんでゐると、現実から単怯な心で逃げていつてゐるものであるかのやうな風に見られる世の中になつて来た。又さういふことを平気で吐く月評家が出てくるやうな世の中になつて来た。これはもつてのほかであります。